

日時

2018年4月29日(日) 12:10~13:10

会場

仙台国際センター 第5会場(会議棟 3F 白檜)

仙台市青葉区青葉山無番地

ランチオンセミナー 11

自由自在の皮膚漢方 ～十味敗毒湯の基礎と応用～

座長

金沢大学医薬保健研究域医学系 皮膚分子病態学 教授

竹原 和彦 先生

演者

近畿大学医学部 皮膚科学教室 講師

柳原 茂人 先生

自由自在の皮膚漢方 ～十味敗毒湯の基礎と応用～

柳原 茂人 先生 近畿大学医学部 皮膚科学教室 講師

江戸時代の漢蘭折衷医、華岡青洲(1760-1835)が創方したとされる十味敗毒湯は、現在我が国において各種皮膚疾患の保険適応をもち、主にエキス製剤の形で処方が可能となっている。華岡青洲が活躍した江戸時代の後期は、蘭学を中心とした西洋の医学が日本に入ってきてつつある時代で、そのなかで廃れつつある漢方医学をうまく西洋医学と組み合わせることで患者の治療に役立てた一人が青洲であった。十分なエビデンスがない=効かない、と思われがちな漢方医学かもしれないが、実際の臨床の場で使うと千年以上の実績の蓄積を感じることができる不思議な医学であることは確かである。

現代医学において、十味敗毒湯は湿疹・皮膚炎群をはじめ、ざ瘡などの化膿性皮膚疾患、蕁麻疹にまで広い適応をもつと遺したのは東西医学を併用して多くの患者を治療した昭和の漢方医、山本 巖(1924-2001)である。ただし十味敗毒湯単独ではなく、加減方で使用することが多かったという。確かに十味敗毒湯の単独使用では弱いが、皮膚科医にはステロイド剤をはじめ各種外用剤などの優れた武器がある。十味敗毒湯はそれらと併用することで西洋医学の作用を助け、患者を速く治療に導くものと信じてやまない。

十味敗毒湯とはいかなる処方なのか。また、加減方はできないが、他剤と組み合わせることでさらに広く適応を広げることができる可能性について述べてみたいと思う。

柳原 茂人 先生 略歴

2005年 関西医科大学 医学部 卒業
2007年 大阪市立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学講座 入局
2013年 博士(医学)取得(大阪市立大学大学院)
2014年 鳥取大学 医学部 感覚運動医学講座 皮膚病態学 助教
2017年 近畿大学 医学部 皮膚科学教室 講師

所属学会

日本皮膚科学会
日本皮膚病理組織学会
日本皮膚かたち研究学会
日本アレルギー学会
日本東洋医学会

資格

日本皮膚科学会認定専門医
神社検定3級